

鳥類の育雛に就て

和田 千藏

鳥類の卵から孵化して出た幼動物を雛と呼んで居るが鳥の種類によつて形態が異つて居る、孵化した時既に柔かな

羽を被り怒ち馳走又は游泳したり食物を自分でゐるものもある、或は殆んどもしくは全く羽を持ってないで而も孱弱で眼さへ開かないでゐるものもある、吾々は前者を早成鳥 (Precocial) 後者を晩成鳥 (Altricial) と呼んで居る、その例をあけて見れば早成鳥には走禽類、雁鴨類、鶉雞類、鶉千鳥類等が屬し、晩成鳥には體制の高等な猛禽類、鳩鴿類、燕雀類、その他の鳥類が屬して居る、就中ヨシキリミカ杜鵑類の雛は顯著な盲目裸體で非常に醜いものである、けれどもフクロウ、ワシ、タカ等の雛は孵化した際には最早柔い綿毛を着て眼も開いて非常に注意深い態度で親鳥から食物を貰て居る。

育雛は通常兩親の協力によるものだが種類によつては雌或は雄の一方のみこれに従ふものもある。又チナムー (Tinamou) ミカクヒナの様に全然雛を育てることを知らないものもある、而して育雛は孱弱な雛を抱き温めるのは勿論食物の撰擇、運搬、給與、給水、巢内の掃除並に自己及び種族保存に關する諸教育を施すものだから、孵化後の親鳥は非常に周到な注意と犠牲を拂て之に當るものである。他方を見るミカ杜鵑族の鳥は自分で巢を造らないで、ウグヒス、モズ等の様な鳥の巢に卵を産んで假親に孵化も育雛もさせるミ云ふ様な横着なものもある。

鳥の育雛状態はその種類によつて一様ではないが早成鳥では孵化後綿羽の乾くと同時に地上を歩き水中を涉游し、食物も各自探して求めるが兩親は害敵を懸念して成鳥となる迄は必ず雛とその行動を共にして、傳育するものである。ニハトリは多數の雛を引連れて食物が親鳥に見附かるミ雛を呼び集めて食物の喰方を教へて居るミは何人ミも見て居る所である。予は青森縣三戸郡鮫港にある蕪嶋でウミネコ (カメノ一種) の雛に親鳥が飛方ミ遊び方ミを教へて居るのを毎年見て居るが、仲々順序がある様に見えるから今御話して見る。そこで飛方を教へるのを見るミ先づ親鳥は食物をや、小高い岩の所に行て雛に與へる合圖をして鳴けば、雛は急に翼を振り上げながら走て行く、親鳥は最早側近くなるミ食物を與へないで又四尺位高い所に去る、さうするミ雛は飽迄喰へ度いため再運動して進行する、それで

も尙喰べさせないで急に遙か以前の距離より五倍位も遠い所に上て雛を呼ぶ、雛は見てるに實に氣の毒の様であるが止むを得ない、それでも呼べば又親の側に行く運動をする、かくして再三再四この動作を繰返へしてゐる間に次第に翼も丈夫になるし始めて飛べる様になる。飛べる様になるに今度は遊ぶことを教へるのでこれも前の方法と大差がない。親鳥が海中に飛下りて先づ魚やクラゲ(水母)の様なものを捕て喰べて見せながら雛を呼ぶので雛が又海中に飛込んで親鳥の側に進むと親鳥が魚を捕へて之を半殺しにする様な動作をして雛の頭の一、二尺位離れた所で魚を投げる。雛はこれを捕て喰べる、次には以前の方法を繰返して次第に距離を遠くしてやる、数日の後には皆各自單獨に游泳して食物を捕れる様になる。又害敵の襲うた場合の防備的動作も皆斯様にして教ふるのである、これを見てるに半日でも鳴から動かれなくなる。ヤマシギとかカルガモ(青森縣方言ドロガモ)の様な鳥はその雛を兩足の間に捌んで食物のある所に運んで行て喰はせ、適宜の時に又前の方法で巢の附近に歸るに云ふ風にして、やや成長する迄この方法を續けるので一寸面白い。今一つ鳥の教育的動作を見たことがあるが、それは先年上野動物園でツルが生れた時、両親は極めて丁寧にこれを養育したことは、實に鳥でさへも所謂教育力あること、考へました、即ち最初はドジャウを小切として與へたが、次にこれを水中に泳かして捕らせることを練習させ、雛の翼が少しく發達した後は親鳥が先導して一度左に向て飛び、次に右に向て飛ぶ様な順序に規則正しく飛翔の方法を教へたのである。

晩成鳥の孱弱な間は數日間親鳥は抱き温めながら給餌、給水の勞をこころし、遂に眼も開き腹部の膨太せる部分もなくなつて日増に本羽も生へ鳴聲も高くなるので、親鳥のこれを愛撫することは實に一方でない。雛は鳴きながら親鳥の哺育を受けるもので親鳥は各雛(一巢中の)に平等に給餌するもので決して偏頗的にはやらない、一回給食させるに直ちに排糞するもので、親鳥はこの糞をば嘴内に入れ巢を離る、こゝ遠い所になけ巢の附近には減多に落して置かない。親鳥が餌を見附けるには仲々努力するもので而も繁忙を極むるものである。ウの様なものとは十里位も離れてゐる海

や湖沼迄往復して魚類を漁り、これを雛に與へるのでこの場合には湖沼で養殖をやつてゐる所に下て幼魚を捕るから、養殖家が大損を受くるのである、カワラヒワの様なものでは幼鳥を引伴れ時に數十の同志が群れて大根や菜類の種子を喰べに來るので農家が閉口するこゝもある。

鳥類の育雛中兩親の一方が死ぬと直ちに他から新しい配偶を求めて養育を續けるものであるが、ツバメ、オオヨシキリの類では繼母鳥に育てられる場合には一寸かわいそうな目にあふこゝがある、先母の雛で余り大きくならないときはこれに石礫や釘屑等を喰はせて殺してしまひ、新たに産卵して仔を育てるこゝ云ふ奇抜なこゝをするのである。之に反してスズメの様なものは何處から持つて來た雛でも籠に入れて外に出して置けば、雛の鳴聲を聞いて他の親鳥が集つて來て丁寧に養てくれる。孤嶋に群棲してゐるカモメ類では巢立した仔鳥を他の親鳥が旺にいぢめるのでこれが原因で親鳥の争鬭が始まり群中の平和を亂すこゝも往々ある。鳥類には數の觀念ミ云ふべきものはなくて只一ミ云ふ他は知らない様に考へられる。だから五羽も居る雛を吾人がその中一羽を残して他を皆捕ても別に悲觀しないのである、又全部を捕てから二日位迄は自己の雛だミ云ふこゝを知て居るので、予は屢クロツクミ云ふよく鳴く鳥の雛を捕て試験して見てゐるが、今日捕る時は非常に親鳥が噪ぎ廻つてゐるが、翌日は全く隠して置いてその翌日三日目に雛のある籠を親鳥に見せるミ、自己の仔なるミをよく知り（他の親の仔ならば何知らぬ顔）萬難を犯しても籠に餌を運んで來て完全に成長させるのである、この三日目に親鳥に見せなければ四日目に出しても余程考へて思案に沈む様にし大抵構はないものである。ハシフトカラス（普通のカラス）は育雛の念實に深いもので、巢は人によく見える所にあるから給餌の一式雛を管理する點などは誠に熱心である、故にこの巢に接近して雛を捕らうミすれば、親鳥は狂氣ミなり頭部を啄き時には眼をも衝かるミがある、鷲鷹の類も仲々猛烈で吾人が大怪我をするこゝもある。カモメ類の育雛中吾人に肉迫されるミ、彼等の大群集して頭上近く下り熱意を散布し時に頭部を突附けるこゝ迄するのは、あ

の優美な姿をしてる鳥には似合はない。カルガモは雛を伴れて游泳中人に追詰められる。親鳥は先づ負傷した真似をするから、雛よりも親鳥を捕らうとして苦心してる間に雛は何處にか隠れてしまふ、その機会を見て親鳥が専心飛去つて行くので雛をかくすに仲々上手である。

親鳥が雛に食物を喰せる方式は又面白いものでハトでは一種特別の哺育を行ふ、即ち生後四、五日間は兩親の唾嚢内で穀類を碎いた白色乳汁様の液(Pigeon's milk)を分泌し嘴で雛の咽喉に入れてのませる、而して四、五日を経てその汁液凝固して分泌しなくなれば、雛は親鳥の咽喉部に嘴を入れて胃にある可消化態の豆類や麥類粃類等を喰べるので、かかる手段を繰返してる間に雛は漸次に發育して自動的に食べる様になる。其の他蜂雀(Humming bird)啄木鳥料の(High hole)等もこれに似た給餌方式をさる。水風鳥は脂肪に富んで食物を液化して育雛の資に供するし、ペリカン(Pelican)は下顎にある大囊中に魚類を入れ置き雛に近寄り雛の嘴を咽喉部に深く入れさして養ひウミネコでは親鳥の餌嚢に貯へて居る食物を雛の前で吐出して喰はせる、一般の鳥は食物を咬へて來て雛の口を開くのを待て喰せるものだが熱心に喰せるもので口角度の大なる鳥では育雛の末期になる。親鳥の顔面部の羽毛は剥けて來るものがある、ハシブトガラスやウグヒスの様な鳥はこの例にはいる。

給食させる回数は無定時だ云ふけれどもツバメでは孵化后十四日目頃から頓に頻繁にやるので、雌雄交互に虫を運んで來る回数は晴天なれば十分間に十五回から二十回に及ぶし、ムクドリ(本校体操場に營巢せるもの)では孵化后十五日目頃から巢立する迄は五分開八回位虫を運んで來るのを認めるので、此餌の運搬は育雛中最も重大の任務を帯んでるので、巢の附近に吾々が近寄るに極力排斥する様に奇聲を張り、彼方此方徘徊し人の去るのを待て巢に寄るのであるから、巢を見附ける時には親鳥の餌運搬を目標として注意せば必ず成功するのである。

晩成鳥は孵化してから巢立(栖立)する迄の日数は種類によつて一様でないが概して二乃至三週間内外を見て差支な

い、育雛中危険に遭遇すること比較的多いものは最も早く安全なる境遇にあるものは晚いものである、ヒバリ、ホ、アカ、カハラヒワ等は最も早くて八月乃至九月で巢立する、アカモズ、オホヨシキリ等は十二日位、モズ、キセキレイ、スズメ等は十三日位、クロツグミは十四日位、シジュウカラ、セグロセキレイ等は十四日位であるが、ツバメは安全な所（人家）に巢を造るから小鳥であるが十九日から二十一日位で巢立をする。巢立した後の雛には當分夜に歸巢するものゝ全く歸らないものゝある、カハラヒワ、ハシブトガラス等は前者にウヅラ、シギ類ウミネコ等は後者の例となる、ツバメは巢立後一夜位は歸巢するが全員巢に入るこがなく附近に宿て居る。巢立する親鳥が更に諸動作に注意し當分の間給食の勞をこるものである。

孵化後獨立の生活をする様になる期間は種類によつて一樣でないが、概して小禽は大禽より短く水禽は陸禽よりも早い様である、而してウヅラ、ガテウ、タンテウツル等では約百日内外で既に成禽と等しい體形になる、タンテウツルは孵化一年で換羽し始めて親子同形となるが頭部の赤色部は二回換羽して完成する、又アヒルは二ヶ月セキセイインコは六ヶ月乃至九ヶ月、コンドル（Condor）シチメンテウ等は三ヶ年で成鳥になる、三光鳥、五位鶯の類は三年を経て親鳥も同様の羽毛になる、ワシは三年カツナドリは平均五年で成鳥の羽毛となる。

幼鳥の獨立して生活し得る様になる親鳥との關係は全くなくなるもので、ニハトリの如きを見しも親鳥と交配させて卵を産ませる様になる、即ち親鳥が苦心して育てても生長するに全く親子關係を相互に忘れてしまうので全く動物的行爲を發揮して居る。

幼鳥の形態は實に様々なもので親鳥の羽色と全然異てゐるものもある、或は成長の雛に似てゐるものもあるし幼鳥の雛は成鳥の雛に似てゐるけれども雄親は全然似てゐないものもある、又ツカツクリ（塚造）の様に親鳥と極似てゐるものもあつて實に様々であるが、一般としては多くの幼鳥は親鳥と異てゐる形態を示して居る。そこでこの事實現象の不可思議

なことに注意して色々の書物を調べて見たら、有名な進化説を立てた英國の (Charles Darwin) 氏の著 *The Descent of man and Selection in relation to Sex* (人類の由來及雌雄淘汰一八七一年) の中に次の様な法則が書かれてあるのを見たからこれを譯記して見る。

(一) 親鳥の雄(♂)が雌(♀)よりも美麗な色彩又は目立つ色彩を呈している場合には、普通の家雞及び孔雀に見る様に、その幼鳥は雌雄共その最初の羽毛は雌の親に似て居る。

(二) 親鳥の雌が雄よりも目立つ色彩を呈する場合(極稀)にはその幼鳥は雌雄共その最初の羽毛は雄の親に似て居る。

(三) 親鳥の雌雄共互によく似て居る場合にはその幼鳥は雌雄共コマドリの様に幼鳥獨持なる最初の羽毛を有して居る。

(四) 親鳥の雌雄共互に似て居る場合にはその幼鳥は雌雄共にその最初の羽毛が成鳥に似て居ることは、カハセミ多くのアム類カラス、カヤクグリ等に於て見る通りである。

(五) 親鳥は雌雄とも夏冬別々の羽毛を有する場合には雄が雌と異なるに論なく、その幼鳥は親鳥の冬毛に類似す、極稀にはその夏毛に似たり或は雌ばかりに似る。或はその幼鳥は中間的特質を有することもある。或は又親鳥の夏毛冬毛の何れとも附かなく非常に異ふこともある。

(六) 少數の場合には幼鳥はその最初の羽毛が雌雄によつて互に異つて居る、多少に拘らず雄の幼鳥は雌親に雌の幼は雌親に類似する。

要之親鳥の傳育は雛の獨立し得る状態になる、その間に過ぎないが、極周到な注意を以てその仔に啄餌法、飛翔法、游泳法とか所謂囀鳴等に至る迄生存上必要な一切の事を教ふるので仲々苦心してる様である。

以上の諸点から推考して見るに鳥類も哺乳類と等しく雛の世に出ても直ちにこれを離散させないで、親は仔の傳育と誘導との勞を取り共に同棲して短いながらも仔は十分生育して各自獨立生活を營み得る迄は一種の家族を構成するものと見て疑がない様である。(完)